

富山の夜空に、 心に残る花火を咲かせたい。

夜空を照らす、平和の象徴。

花火師の娘として生まれ、大学卒業後、一度は名古屋市内の企業に勤めましたが、2004年に家業を継ぐことに決めました。きっかけは富山城で行われている年末のカウントダウンイベントの時に、父の手掛けた音楽花火を見たことです。音楽と花火がシンクロする面白さ、人々の歓声や興奮に包まれた光景は今も忘れられません。

夏の風物詩であり、毎年8月1日に行われる「北日本新聞納涼花火大会」は、富山大空襲の2年後に犠牲者の鎮魂を込めて始まったもの。以来、連発花火や尺玉など約三千発もの花火を打ち上げています。

かつて新聞で、「花火の音を聞くと戦争を思い出してしまう。しかし、今年



▲ 富岩運河環水公園での花火打ち上げの様子

大橋智子さん

初めて花火を見に行ったら、ほんとうに美しいものだった」という投稿を目にした時、平和の象徴として継続して打ち上げている花火の重みを実感しました。思いを込めて打ち上げた花火が富山の人たちに喜んでもらえることは、とても幸せだなと思います。

時を知らせる花火。

明治初期の創業から祖父の代までは、主にトンネル工事の発破作業に使う爆薬や猟銃の火薬などを取り扱う火薬店でした。明治34年からは、人々に毎日正午を知らせる午報と呼ばれる音花火を打ち上げるようになり、これが今の花火につながっています。

長い間市民に親しまれてきた午報は、その伝統を受け継ぎ、昭和31年から、毎年6月10日「時の記念日」の正午に、「ドン」と一発、大きな音を響かせています。

花火師であると同時に2児の母。

花火の打ち上げ現場では、直接点火の様子を傍で見ると怖く感じたこともありましたが、花火師という男性ばかりの職業に抵抗を感じたことはありません。ただ、2児の母として悩ましく思うこともあります。多忙な夏季は、子どもたちと夏休みの思い出をあまり作れません。それでも自分が企画した花火を見せることで、母の生き方を見せたいと思っています。私も幼い頃は、父の花火を見に行っていたのですから。

エンターテインメントとして花火が求められるようになったのは、父の代からです。今は花火専用のコンピューターを導入し、多くの人々に喜んでもらえる新しい企画を常に考えています。

これからも伝統を大切に、最新花火の導入や精密なプログラム作成などに挑戦しながら、富山の人々の心に残るような花火を打ち上げていきたいです。

この連載では、富山で活躍するさまざまな方の「アメイジング（驚くほど素敵）」な富山について掲載します。また、WEBサイトでは皆さんのアメイジングなエピソードも募集しています。
▶ 詳細は、「アメイジング トヤマ」で検索してください。



▲WEBサイト

大橋智子(おおはし ともこ)さん
富山市出身。(有)マツダで花火師として花火の打ち上げ企画・演出を行う。結婚・出産を経て現場に復帰。